多くの漁師が船のまわりに集まり、そこに括られた物を見ていた。一人はズボンの裾をまくり上げて水に入り、その骨の全長をロープで測っていた。

　少年は下りて行かなかった。先に一度来ていたし、船の片付けは漁師の一人がしてくれている。

「様子はどうだ？」漁師の一人が大声で尋ねた。

「寝てるよ」少年も大声で言った。泣いているのを見られても、少年は気にしなかった。「そのまま、寝かせといてあげよう」

「鼻の先から尻尾まで、十八フィートあるぞ」魚を測っていた漁師が大きな声で言った。

「そうだろうね」少年は言った。

　彼はテラスに行き、缶にコーヒーを貰った。

「熱くして、ミルクと砂糖をたくさん入れてよ」

「他には？」

「いや、また後で、何を食べられそうか聞いてみる」

「とんでもない魚だったな」店主が言った。「あんな魚、初めてだ。お前も昨日立派なのを二匹釣ったしな」

「あんなの駄目だ」少年はそう言って、また泣き出した。

「何か飲むか？」店主は尋ねた。

「いい」少年は言った。「みんなに、サンチャゴを邪魔しないように言っといて。また来る」

「気の毒だ。よろしく伝えてくれ」

「ありがとう」少年は言った。

　少年は、コーヒーの入った缶を持って小屋へ行き、老人が起きるまでそばに座っていた。老人は一度起きそうな様子を見せた。しかしまた深い眠りへと戻った。少年は通りを渡って、コーヒーを温めるための薪まきを借りてきた。

　とうとう老人は目を覚ました。

「起き上がらなくていいよ」少年は言って、コーヒーをコップに注ついだ。「飲んで」

　老人は受け取って飲んだ。

「マノーリン、やられたよ」彼は言った。「奴らに完全にやられた」

「やられてないじゃないか。あの魚に」

「ああ、そうだな。その後だよ」

「ぺドリコが船と道具の片付けをしてるよ。あの頭はどうする？」

「ぺドリコにやろう。刻めば仕掛けに使える」

「槍は？」

「欲しけりゃやる」

「欲しい」少年は言った。「ねえ、色々と計画を考えないといけないよ」

「みんなは俺を探してたのか？」

「もちろん。沿岸警備隊も、飛行機も出たよ」

「ばかでかい海に小さな船だ、見つけるのは難しい」老人は言った。自分自身や海に話しかけるのではなく、目の前の相手と話せるのは、なんと嬉しいことだろうと彼は思った。「会いたかったよ」彼は言った。「魚は何を獲った？」

「一日目に一匹。二日目も一匹で、三日目は二匹」

「立派なもんだ」

「今度はまた一緒に行こう」

「駄目だ。俺には運が無い。すっかり無くなったんだ」

「運なんて」少年は言った。「僕が持って行けばいいよ」

「お前の家族がどう言うかな」

「どう言ってもいいよ。昨日は二匹も釣れたんだ。でもまだ教わることがたくさんあるから、一緒に漁に行きたい」

「鋭くて強い槍を手に入れて、船に準備しておく必要があるな。刃の部分は、古いフォードの板バネで作れる。グアナバコアに持って行って研磨すればいい。尖ってなきゃいけないが、折れるようじゃ駄目だ。俺のナイフは折れたんだ」

「別のを見つけてくるよ。バネも研いでもらう。このひどい風ブリサは、何日続くの？」

「三日くらいだな。もっとかもしれない」

「用意は全部やっておくよ」少年は言った。「サンチャゴは手を治して」

「手の治し方は分かってる。だが、夜中に変なものを吐き出して、胸の中がおかしくなったような気がしたんだ」

「それも治しておいて」少年は言った。「横になってなよ。後で綺麗なシャツを持ってくる。食べ物もね」

「俺のいない間の新聞を頼むよ」老人は言った。

「早く良くなって欲しいんだ。教わりたいことがたくさんあるんだよ。サンチャゴは何でも教えてくれるんだから。どのくらい辛かった？」

「並大抵じゃない」老人は言った。

「食べ物と新聞を持ってくるよ」少年は言った。「よく休んで。手に効くものも薬屋で見つけてくる」

「忘れずにぺドリコに伝えてくれ、頭はやるって」

「うん、必ず」

　少年は外へ出て、磨り減ったサンゴ岩の道を下って行った。彼はまた泣いていた。

　その日の午後、観光客の一団がテラスを訪れた。一人の女が海を眺めていると、ビールの空き缶やカマスの死骸が浮かぶ水面に、巨大な尾びれのついた長く白い背骨が揺られているのが見えた。入り江の外側では、東風が大きな波を立てている。

「あれは何？」女は給仕に問いかけ、巨大な魚の長い背骨を指差した。それはもはや、潮に流されるのを待つばかりの屑に過ぎなかった。

「ティブロンが」給仕はそう言ってから、訛った英語で言い直した。「サメが…」彼は事情を説明しようとしたのだった。

「知らなかった。サメの尻尾があんなに立派で、綺麗な形だなんて」